

# 日本語の文字の分類案

福盛 貴弘 (大東文化大学)

キーワード：日本語、文字、文字学、文字論、字節

## 1 序

本稿は、福盛・池田(2002)で示した文字の一般文字学的分類をふまえて、日本語で用いられる文字という個別文字学への適用を主たる目的としている。従って、本稿の用語は福盛・池田(2002)に従う。ただし、一部見解が変わったものは、付記および改訂を行なった。

また、本稿では主に文字学、すなわち文字の形状的観点から出発して論を進める。そこで、日本語の文字の分類案を示す前に、文字に関する前提を確認しておきたい。

文字とは、言語を表記するための記号であり、主として視覚的に示され、平面的に表記されるものを指す<sup>1</sup>。形状的には、線状(線形)でも絵でも、それが言語を表記していればどちらでもよいが、いずれの形状にせよ、ある程度抽象化した形状であると考えられる。抽象化には相対的な程度差があり、抽象化されていても文字であるとは限らない。だが、美術館に展示されているような絵画がそのまま文字にはなりがたい。この点で、程度差はあるものの、抽象化を形状的基準として考慮しておく必要はある<sup>2</sup>。ま

---

<sup>1</sup>文字に対する定義というのは一義的なものではなく、ある程度の共通理解が得られる範囲に部分的に重複していれば、文字とみなすことができる。例えば、粘土板に文字を書けば厳密には三次元的であるが、視覚で捉える際には平面的に捉える。また、点字は紙から点が浮き上がっており、主として触覚で読むが、私を含めた多くの点字翻訳者や点字使用者の一部は点字を触覚ではなく視覚で捉えて読んでいる。また、点字には二次元で表記するための墨点字もある。現実的に立体的であるか否かに関しては、粘土板や紙など書かれる媒体と文字との間に、コントラストがあればよいとすれば、ある程度包括的に特徴が捉えられる。(ただし、例えば色をつけることが前提ではないなど条件付けが必要。)本来、こういった定義からの派生および定義の条件付けなども含めて考察すべきであり、今後の課題としたい。

<sup>2</sup>形状と表音性をあわせて考えた場合、いくら言語音を示していても、サウンドスペクト

た、日本語におけるかなや漢字やローマ字といったそれぞれの文字体系には形状の特徴がある。一例として、「 」「 」「 」「 」といった形状から検討してみる。かなは、3者ともそぐわない。漢字は、「 」「 」「 」はそぐわないが「 」は部首における「くにがまえ」が類似する。ローマ字は、「 」「 」はそぐわないが「 」は「O,o」が相当する。こういったように、抽象化した線形から文字体系の特徴を捉えることも可能である。最後に、文字にとって表音性および表意性は共に必要十分条件ではない。これに関しては、2節で論じることにする。これらをふまえた上で、日本語の文字に関して考察を以下で行なっていく。

## 2 文字に対する単位の設定

本節では、福盛・池田(2002)で文字の単位として設定した「字節」「字句」「字素」を再考していく。

字節とは、形状として一まとまりをなす単位である。日本語のかなや漢字であれば、(原稿用紙の)1マスの中に表記する文字、例えば「あ」「ア」「ざ」「っ」「字」などが1字節に相当する。ローマ字の場合は1マスに「an」を表記するが、半角単位で区切ることができる「a」「n」それぞれが1字節に相当する。こういった例からも分かるように、字節は現時点では徹頭徹尾一義的に設定できる単位ではなく、母語話者が半ば主観的あるいは観念的に形状の一まとまりを捉えた単位だといえる。

多くの文字において、形状的な一まとまりは使用者内でおよその共通理解があると考えられる<sup>3</sup>。それは、厳密に何を文字とするかを定義できなくても、「文字はいくつ?」という問いに概算的に数値を用いて回答を出す点から窺知される。また、漢字を読む際に個々の部首に分解して読むのが自然だとはいえず、文字の書字方向が縦でも横でも、通常はその方向に対し一まとまりの形状を捉えて線条的に読んでいくのが自然である。例えば、ハングルは分析的に読む研究者は別にして、一般的には個々の単音の

---

ログラムやオリンパス社製 Sound Talk で示される図像コードを文字と捉えるものはいないと思われる。また、IPA(国際音声記号)に関しては、音そのものを表すことが主たる目的であって、言語の単語を表すことが主たる目的ではない。よって、表音性はあるものの、文字とは異なる扱いをすべきだと考える。

<sup>3</sup>未解読文字や使用者がいなくなってしまう文字では、内省の力をかりられないため字節の解釈にゆれが生じることが予想される。

要素を1つ1つ追うのではなく、複数の単音の要素が集まってできた一まとまりを1つ1つ追っていくものである。この点からも、形状的なまとまりをなす単位で文字を捉えていることがうかがえよう。

ただし、現時点において文字学的単位としての字節は厳密な意味で定義できない。しかし、定義できないから一刀両断されるというわけではなく、音声学や音韻論において音節が厳密に定義できない点と共通しており、その意味では離散的に仮構された単位をもとに文字を考察すること自体は否定されることではない。現に、この単位を設定しなければ、文字体系の特徴は捉えにくいと考えられる。この問題に関して以下で検討を加える。

まず、文字が表音機能・表意機能を担うかという点から考察する。多くの文字はどちらかの機能を担っている。一方で言い方を変えれば、文字(字節レベル)は常に表音機能を担うわけではなく、常に表意機能を担うわけではない。後者は、いわゆる表音文字がそうである。表音文字は、「単音文字」「子音文字」「音節文字」の3種に大別できるが、いずれも表意機能は前提としない。例えば、日本語におけるひらがな・カタカナやローマ字は、「あ」「カ」「a」といった字節レベルで表意機能を担うことを前提としない点からも明らかであろう。一方、前者はヒエログリフにみられる限定文字が代表的である。限定文字は、子音文字で示された語に後置させ、その語の意味(王・神など)を示すものであり、音価はない。しかし、音価がなくても、他の子音文字と形状的に類似性があり、限定文字を他の子音文字とは別の文字体系と区別する根拠は形状的にはない。日本語のかな文字を繰り返す「ㇿ」「ゝ」「ゝ」や漢字を繰り返す「々」<sup>4</sup>も同様に、それぞれの文字体系の形状から大きく逸脱していない点が重要である。字節は、形状的に類似する特徴をもった文字体系の中で、形状的に一まとまりだとみなすことで離散的に分けて得られる文字学的な単位である。従って、文字学的には出発点として「字節」があり、その字節に対して表音的であるか表意的であるかの特徴を捉えていくことになる。一方、表音機能を前提として文字の単位を考えるのは筆者の立場では文字論の範疇だと考えている。よって、樺島(1977)にみられる「表記要素」の考え方、一例をあげれば

<sup>4</sup>これらの文字の表音性に関しては、単独では読み方がないものの、前接する文字と同じ読み方をするという意味での表音機能を有するので、福盛・池田(2002:49)における消極的表音機能の一種だと考える。

音節に相当するのは「か」「きゃ」「しゅう」であるためこれらを文字の 1 単位として捉える立場は、文字論的な問題だといえよう。

次に、文字が単独で読めるか否か、別言すれば字節で定まった読み方があるか否かは、形状的に捉えようとする文字学的観点における文字の十分条件ではないという点である。限定文字がその例に相当することは先述したとおりであるが、表音文字においてもこれに相当する例がある。日本語であれば、「つ」「や」「あ」を小さく書いた「っ」「ゃ」「ぁ」などがそうである。表音機能を考慮すると、「っ」「ゃ」「ぁ」などは単独での読み方はなく、前接するかなと合わせることで音節となり読むことができるのである。しかし、形状的に「っ」「ゃ」「ぁ」がそれぞれ「つ」「や」「あ」と類似した特徴を有することは明らかである。また、「つ」も「っ」も 1 マスに表記する。これらの点から、文字学的に「っ」「ゃ」「ぁ」などは 1 字節と考えて差し支えないだろう。ただし、文字論的に表音機能を論じる際には、「っ」「ゃ」「ぁ」のみで捉えるわけにはいかず、「あっ」「きゃ」「ふぁ」といったように捉えなければならない。この点を考慮して、字句という単位を設定する。字句は、1 字節以上をもってまとまりをなす単位である。この字句によって、例えば文字論的表音機能において音節を表記する単位を考察する場合には、「か」「きゃ」「しゅう」の全てを 1 字句とし、文字学的にはそれぞれ 1 字節、2 字節、3 字節とすることで文字学的単位と文字論的単位との学問的基盤の違いを明示できるのである。また、文字論的表意機能において単語を表記する単位を考察する際に「五」「文字」「五月雨」を、それぞれ 1 字節 1 字句、2 字節 1 字句、3 字節 1 字句というような適用も可能である。こういった点から、字節と字句は量としては「字節

字句」であり、質としては字節が文字学的単位で字句が文字論的単位として扱うべきものだと考えられる。従って、「っ」「ゃ」「ぁ」といった文字は、形状的にかなと同一体系をなすという点から出発し、字節レベルでは表音機能や表意機能は必要十分条件ではないということが確認できたことになる。

最後に、字節をより小さい単位に分解できるか否かを検討していく。例えば、漢字の部首は、字節として成立している文字をより小さい単位に分解したものだと考えられる。また、ハングルは、字節としては音節に相当

するが、単音を示す個々の要素が組み合わさった形状だと捉えられる。これらの例にみられる字節をより小さい形状に分解したものを字素と呼ぶことにする。ただし、字素が文字の最小単位であるか否かは保証できない。それは音韻論にみられる「音節 > 音素 > 弁別素性…」のように<sup>5</sup>、最小というものは設定しようと思えばいくらでも設定できるという点に依拠した考え方である。ここから、文字学的には、字素の集合体が字節であるというより、字節を分解すれば字素があるというように字節を出発点として文字を捉えていきたい。この前提で字素を考えると、例えば、漢字において表音機能を有する部首や表意機能を有する部首を捉えていく場合や、ハングルにおいて個々の単音の表音機能を捉えていく場合は、文字論的問題となる。従って、字素も字句と同様に文字論的単位として扱われうるものである。また、1字節が部首である漢字もあり、こういったものは1字節1字素といえ、量としては「字素 字節」が成立する。

字素に関しては、もう少し議論を加えておきたい。例えば、ひらがなにおいて「あ」と「め」は形状的に類似しており、(活字体の場合はバランスなど他の要因で区別されているが、手書きで書かれた場合には、)主に横棒の有無によって弁別的に区別できよう。また、「ね」「れ」「わ」は第2画の最後の部分で「丸める」「右にはねる」「左にはらう」ことで弁別対立をなしていると捉えることもできる。ただし、これらはこの対立のみのものであって、他のかなに対して体系的に波及しているわけではない。この点から、文字論的には「あ」の横棒や「ね」「れ」「わ」の第2画の最後の部分は字素とみなさず、「あ」「め」「ね」「れ」「わ」それぞれを字素とみなすのが妥当だと考えられる。一方で、文字学的に字節を分解していくことに関しては問題が残り、現時点で形状的観点から字節を分解するための適切な案を提示することができない。しかし、形状的観点から分解することに関して考察する余地は残されているため、案の提示は今後の課題としたい。

もう1点、かなにおける濁点・半濁点についても検討しておきたい。かなにおける濁音は単独では字節として成立しない。また、表音機能に関しても単独では1対1対応する音価はない。濁点は、無声閉鎖音および

<sup>5</sup>音節、音素、弁別素性がそれぞれ根底となる考え方は異なるという意味で質の違いはあるが、量として大小関係が成立するという意味で述べている。

無声摩擦音を表記するかなの右上に付記し、元の字節と濁点とを合わせることによって有声閉鎖音および有声摩擦音をあらわすことができる。例えば、「か」「さ」が「が」「ざ」になるといった関係である。ただし、濁点があつても[+有声]であるかといえばそうではない。共時的には「は」と「ば」は無声摩擦音と有声閉鎖音の関係であり、この関係には通時的に八行音が  $p > \quad > h$  と変遷してきた事情をあわせて考えなければならない。従って、歴史的には濁点[+有声]という解釈もありうるが、現代において元の字節に濁音をつけることで元の字節の音価が有声になったと捉えるのは適当ではない。それ以上に問題となるのは、(規範的な文字表記ではないが、)もともと有声音である「あ」や「ま」などに濁点をつける表記である。「あゝ」「まゝ」の音価が何であるかを紙面で表記するのは困難であるが、それぞれ元の字節の音価をガラガラ声・だみ声や怒鳴る感じなどなんらかの意味で「濁った」音で表現することが多いと思われる。この場合、もともと有声音であるため、濁点の「濁」というイメージから新たに派生した音価だと考えられる。このように濁点の表音機能は必ずしも一様ではないものの、濁点だけで何か特定の音価があるというわけではなく、どの字節と結びつくかによってあらわす音が変わるという点は共通している。また、規範的な文字体系でカ・タ・サ・八行に濁点がつくという点で、先述した「あ・め」「ね・れ・わ」の例のように一組のみの弁別的対立をあらわすわけではない特徴がある。これらの点から、濁点は文字論的に字素とみなすことができよう。なお、半濁点に関しても述べておくと、「は」と「ば」が無声声門摩擦音と有声両唇閉鎖音の関係であり、「ば」は「は」と「ば」ではあらわすことができなくなった無声両唇閉鎖音を示すための表記である。これが拡大して、例えば、鼻濁音を表記する際に「か<sup>◌</sup>」のような表記がみられるが、これは字節の音価における調音部位と調音様式が類似していて、既存の濁点の有無だけではあらわせない音価を表記する際に用いられたと解釈できる。この点で、八行全てに半濁点をつけられる点と、規範的な表記以外で拡大してつけられているものがある点において、濁点と共通している。よって、半濁点も字素とみなすことができよう。ただし、濁点・半濁点共に単独で字節を形成することはできない。この点をふまえて、字素には自立性の高い、すなわち単独で字節をなすことができ

る自立字素と、自立字素と結びつかなければ字節を構成できない付属字素との2種に大別しておくのがよい。二分法では中間段階や程度差などをどう扱うかに問題が残るが、現時点では出発点として2種に大別する案を示すにとどめ、残すところは今後の課題としたい。

以上の考察から、文字に関する単位は量的には「字素 字節 字句」の関係が成立し、質的には文字学では字節を基本とし、字素および字句は主に文字論で扱う単位であるとまとめておく。

### 3 文字の種類

文字の種類に関しては、福盛・池田(2002:40-50)において検討した。以下に若干の改訂を加えた要約を示す。

大きな類型としては、単音字節型・子音字節型・音節字節型を設定し、略称として単音型・子音型・音節型と呼ぶことにした<sup>6</sup>。単音型は、狭義のアルファベット、別言すれば子音・母音の両方を表記できる文字を指す。子音型は、主に語根や接辞などの形態論的単位を書き記すのに使われ、表音は本来その二次的な用途であったと思われるという点で質的に単音型と異なり、主に子音を表記する文字を指す。音節型は、子音・母音が入り混じったCV・CVC・VC・CCVなどが書きあらわせる文字を指すが、字節レベルで音韻論的音節と一致することは前提としない。よって、音韻論的音節ではCV・CVCを基本とする言語において、文字はCV・CVC以外にCCVを示すものがあってもかまわないことになる。

いわゆる表意文字に関しては、先述した類型の下位分類にあらわれる。音節型の下位分類として、表語音節型や表語音節限定型などがある。表語音節型は、Gelb(1963)における文字は非言語的な「意」ではなく言語の「語」を示すのが表意文字だという指摘に、語には対応する表音性、すなわち単音節以上の読み方がある点を加味して設けた名称である。なお、表語音節型も音節型と同様に字節レベルで常に語と対応することを前提とし

---

<sup>6</sup>この点に関して、福盛・池田(2002)と見解が変わっている。福盛・池田(2002:43)では、表音文字の表語性を考慮して「単音表語字節型」「子音表語字節型」「音節表語字節型」としていたが、本稿の見解ではここでいうところの表語性は文字論の範疇として扱うべきだと考えるため、「単音表語字節型」の「表語」は取り除く形となった。その他に関しては、基本的な立場は変わっていない。

ない。漢字では2字節1字句で単語を示す場合が多い点や、「五月雨(さみだれ)」のような熟字訓では各々の字節より字句の表語性が優先される点をふまえている。ただし、これは主に文字論的問題で、文字学的な字節に対する類型としては、字節でなんらかの語を示そうとする程度差が高いと思われる文字を表語音節型として分類しておく。表語音節限定型の限定に関しては、シュメール文字やエジプト文字にみられる限定符(決定詞)が代表的である。これは、後続ないし先行の文字列とともに1つの字句を形成する付属(拘束)字節であり、母音・子音・音節に対応するような表音性はない文字である。また、限定符のみで構成される文字体系はないので、下位分類とした。

## 4 日本語の文字に関する考察

以下で、日本語を表記するために用いられる文字に関する考察をし、最後に表で文字の分類を示す。ここでは、いわゆる表音文字と、いわゆる表意文字の中で日本語に用いられる表語表音文字とに区別して論じる。

### 4.1 表音文字

まず、ひらがな(日本語式音節型ひらがな系文字)、カタカナ(日本語式音節型カタカナ系文字)、ローマ字(日本語式単音型ラテン系文字)といった表音文字<sup>7</sup>に関して、構造・表音自立性・位置・読みの4つの観点から検討する。

構造は、単音V(母音)・単音C(子音)・音節・超分節音の4つに大別する。それぞれ代表的な文字を列記しておく。単音Vは「あ」・「ア」など、単音Cは「ん」・「っ」・「きゃ」における「き」など、音節は「か」・「や」・「ゃ」など、超分節音は「ー」・「きょう」における「う」などである。なお、「イト」の「ト」は、城生他(1988)で試みられたかなで子音のみを表記する方法で、「イト」は[ito]、「イト」は[it]となる。

表音自立性は、字節単独で音節を示す文字、モーラを示す文字、単独では音節にもモーラにもなりえない付属性が高い文字という順で、自立性と付属性の程度差を考慮した。「あ」・「か」などは音節、「ん」・「っ」などは

<sup>7</sup>点字および点字を平面的に示した墨点字は、日本語式音節型点字系文字であり、表音文字として扱える。点字に関する詳細は改めて別稿で論じたい。



モーラ、「ゃ」「カ」などが付属性の高い文字である。また、表中の矢印は字句レベルで音節や語を表記するという点を考慮した場合、例えば「きゃ」の「ゃ」のように前方に依存するものを「ゃ」、「きゃ」の「き」のように後方に依存するものを「ゃ」、「1ヶ月」の「ヶ」のように前後双方に依存するものを「ゃ」で示している。

位置に関しては、「あ」・「か」のように語頭にたつものと、「ゃ」・「ん」・「っ」のように語頭にたたないもの、すなわち語頭にたつか否かで大別した。語頭にたたない文字は、表音自立性とは異なる基準で、付属性が高いと考えられる。

読みは、固定・前に依拠・後に依拠・なしの4つに大別した。固定は字節レベルで読み方が一定である「あ」・「ア」・「か」など、前に依拠は「ー」のように「アー」「イー」といった前接の文字によって読みが変わるもの、後に依拠は「ん」・「っ」のように「さんばん」「さんだん」あるいは「かっぱ」「かった」などにみられるように後接する文字によって読みが変わる(異音になる)ものである。なしはローマ字の「kin'ya」で「キニヤ」ではなく「キンヤ」と示すための「'」が該当する。

なお、表中のローマ字表記に関して若干説明しておく<sup>8</sup>。日本式<sup>9</sup>の「ā, î」およびヘボン式の「ā, î」はそれぞれ「アー」・「イー」といった長母音を示す。海津式の「a<sub>u</sub>, i<sub>u</sub>」も「アー」・「イー」といった長母音を示すが、後のaやiに下線が引かれているのは、こちらは「ア」「イ」ではなく「ー」に該当する部分の特徴を示したいが故である。海津式の「a<sub>h</sub>, o<sub>h</sub>」の「h」も同様である。99式の「e<sub>i</sub>, ou<sub>i</sub>」は母音連続ではなく、「せんせい」「おとうさん」などのかな表記に合わせたローマ字表記を指す。竜岡式の「t'i」は、「チ」と「ティ」を「ti」と「t'i」のように区別した表記である。海津式の「aq」の「q」や竜岡式の「a'」の「'」は、語末に促音が来る際に用いる表記である。

<sup>8</sup>本文中で示すもの以外は、日本式・ヘボン式の表記として有名なので説明は省略する。

<sup>9</sup>～式の略号は、以下の通り。ヘボン式は、James Curtis Hepburn が書いた表記を、羅馬字會(1885)やローマ字ひろめ会が修正して現在定着している表記法。日本式は、田中館愛橘(1885)が示した表記法で、後の訓令式の基礎になっているもの。海津式は、海津知緒氏による表記法。<http://www.halcat.com/roomazi/index.html> 参照。竜岡式は竜岡(1999)、99式は日本ローマ字会(1999)をそれぞれ参照。

## 4.2 表語表音文字

次に、漢字(日本語式表語音節型漢字系文字)、アラビア数字(日本語式表語音節型アラビア数字系文字)、ラテン文字(日本語式表語音節型ラテン系文字)、ギリシア文字(日本語式表語音節型ギリシア系文字)、絵文字(日本語式表語音節型絵系文字)といった表語表音文字を検討する。こちらも4つの観点から検討するが、その前にそれぞれの文字を「表語音節型」とした理由を述べておく。

漢字に関しては、大きな異論はないと思われるので略述する。アラビア数字に関しては、日本語で扱う場合には「イチ、二、サン...」「ヒト、フタ、ミッ...」などのように読み方があるため、表語音節型とできる。ラテン文字に関しては、ローマ字表記の場合には単音型であるが、通常の漢字かな混じり表記であられるラテン文字は「A地点」「友人F」「kg」などのように単音文字ではなく、主に表語機能をもって使われる。この点をふまえて、ラテン文字はローマ字表記における「単音型」と漢字かな混じり表記の中で用いられる「表語音節型」とに分けるのが妥当だと判断した<sup>10</sup>。ギリシア文字もラテン文字と同様に「プラス」「カロチン」などの例から表語音節文字として一部の文字が使われているため、ここに加えた。最後に絵文字に関しては、若干の問題が残るので、後で改めて論じる。

では、構造・表語自立性・位置・読みの4つの観点から検討する。

構造は、表音文字と同様に、単音V(母音)・単音C(子音)・音節・超分音の4つに大別する。ここで取り上げた表語表音文字は表語音節文字であるので、基本的に音節に該当する。ただし、漢字の場合には音節を前提としながら結果として単音V(母音)を示す場合もあるので、括弧つきの丸「( )」を付記した。また、「々」は形状的に漢字と同様の扱いにしたため、漢字の項に含めた。

表語自立性は、語を示すのに単独で用いられるものを最も自立性が高いと設定し、文字論的表語性に依存しなければならない場合には主従関係で自立性と付属性の程度差を示した。文字論的表語性に依存するのは主に漢字である。訓読みで送り仮名を必要とする場合には、漢字を主とし送り

<sup>10</sup>漢字かな混じり表記の中にローマ字表記がみられる場合、外国語を原文表記で示すのと同様に「引用」的な扱いだと考えられる。

仮名を従とした。熟字訓の場合には、各々の字節は相互依存して成り立っていると想定し、字節単独では用いられないが主従関係はないものとして扱った。「々」は単独では用いられず、前接する漢字に対して従となるものとして扱った。

位置に関しては、表音文字と同様に、語頭にたつか否かで大別した。ただし、熟字訓の場合は字句の配列というできあがった結果論で語頭にたつか否かが決定されるため、暫定的に中間的な位置付けで扱った。この判断は今後の課題となる。

読みに関しては、固定・前に依拠・後に依拠・不特定の4つに大別した。固定は、字節単独である程度規範的に読み方が決まっているものを指し、読み方は複数あってもよい。前に依拠は、「々」のように単独では読めず、前接する漢字によって読み方が決定するものを指す。後ろに依拠は、例えば「上る」は「のぼる」「あがる」と2通りに読めるが、「上がる」は「あがる」としか読めないといったように、後接する文字によって読み方が変わりうるようなものを指す。熟字訓のような場合は、字句でしか読み方が決定できないため、前に依拠・後に依拠の両方に該当すると暫定的に解釈した。最後に、不特定である。固定と不特定との大きな違いは、規範的に定められているか否かで区別した。この点からみれば、携帯電話のメールで用いられる絵文字は、ある程度読み方の範囲は定まるものの、規範的に読み方が決定しているとはいえない。しかし、例えば足の絵が書かれていて、前後の文脈から「足」と読むか「歩く」と読むかは特定できよう。従って、全く読めないというわけではない点を考慮しつつも、規範的ではないので不特定としたのである。

最後に、絵文字に関して若干付け加えておく。絵文字は、日本語を表記する「日本語式」という意味では、日本語式表語音節型ラテン系文字・日本語式表語音節型アラビア数字系文字・日本語式表語音節型ギリシア系文字などと同様に、1つの文字体系だけで表記できるだけでなく、漢字がな混じり表記の中に混ざらなければならない制約がある。この制約からみれば、絵文字だけ別段に扱う理由はない。読みに関しては、規範的か否かに関しては日本人であれば現時点ではおよそ否という見解に収束すると思われるが、青年層以下ではある程度一定の読み方があると思われ、いわゆる

暗号よりは伝達機能も高いと考えられる。一般文字学的観点から形状的にみれば、文字は線形でも絵でもかまわない。しかし、日本語では少なくとも現代における規範的な文字は線形の文字のみである。よって、絵文字の形状が絵であるということが規範意識と衝突しており、文字とみなせないのかもしれない。だが、繰り返しになるが、絵文字は一般文字学的に問題なく存在するため、これを排除する理由はない。これらの点から、まだ問題は残るものの、絵文字を表音節型として、他の文字体系と同様に「文字」と認定して本稿で扱うにいたった。

## 5 結語

日本語の文字の分類案のまとめを表1~2に示す。字節レベルで巨視的な分類案を示した福盛・池田(2002)に対し、本稿で個別文字学的に検討を加えた点は本研究の成果といえる。ただし、現時点では暫定的な案であるため、今後さらに詳細な検討を重ねていきたい。

表1-1: 表音文字の分類案

	構造				表音自立性		位置	読み				
	単音 V	単音 C	音節	超分節音	自立	付属		語頭	固定	前に依拠	後に依拠	なし
<かな> 日本語式音節型ひらがな系文字、日本語式音節型カタカナ系文字												
あ、い、ア...		x		x								
あ、い、ア...		x		x				x				
(こ)こ、(こ)こ...	x	x	x					x	( )			
か、き、カ...	x	x		x								
や、ゆ、ヤ...	x	x		x				x				
1ヵ月、1ヶ月...	x	x		x				x				
1ヶ...	x	x		x				x				
きゃ、テイ...	x		x	x								
エイ、イト...	x		x	x								
エイ、イト...		x		x								
ん、ン...	x		x	x				x	( )			
っ、ツ...	x		x	x				x				
ゝ、ゝ...	x	x	x	x				x				

表 1-2：表音文字の分類案

<ローマ字> 日本語式単音型ラテン系文字										
a, i ...		x		x						
â, î (â, î)...	x	x		x						
aj, ij ...	x	x	x				x			
ej, ou ...	x	x	x				x			
ah, oh ...	x	x	x				x			
ka, ki ...		x		x			x			
ka, ki ...	x		x	x						( )
kya, tja, kwa ...	x		x	x			x		( )	( )
t'j ...	x	( )	x	x			x			
kâ, kî ...	x	x		x			x			
kaa, kij ...	x	x	x				x			
kan, kin ...	x		x	x		( )	x		( )	
kin'ya ...	x	x	x	x			x			
kamma ...	x		x	x			x			
kippu ...	x		x	x			x			
aq, a' ...	x		x	x			x			
chi, tsu ...	x	( )	x	x						
chi, tsu ...	x	( )	x	x			x			

表 2：表語表音文字の分類案

	構造				表音自立性		位置	読み				
	単音 V	単音 C	音節	超分節音	単独	相互依存		語頭	固定	前に依拠	後に依拠	不特定
<漢字> 日本語式表語音節型漢字系文字												
音読み	( )	x		x								
訓読み・*無	( )	x		x								
訓読み・*有	( )	x		x								
*送り仮名	( )	x		x			x					
熟字訓	x	x	( )	x					( )	( )		
々	x	x	x	x			x					
<アラビア数字> 日本語式表語音節型アラビア数字系文字												
1, 2, 10, 100 ...	x	x		x								
<ラテン文字> 日本語式表語音節型ラテン系文字												
cm, kg ...	x	x		x								
A 国、友人 F ...	x	x		x								
<ギリシア文字> 日本語式表語音節型ギリシア系文字												
、プラス	x	x		x								
<絵文字> 日本語式表語音節型絵文字												
携帯絵文字	x	x		x					( )	( )		

## 【参考文献】

- 福盛貴弘・池田潤(2002)「文字の分類案 一般文字学の構築を目指して」『一般言語学論叢』4・5、35-58.
- Gelb, I.J. (1963) *A Study of Writing*, Rev. ed., Chicago: University of Chicago Press.
- 城生佰太郎他(1988)『カナで引く外国語辞典』三省堂
- 樺島忠夫(1977)「文字の体系と構造」『文字』岩波講座日本語 8、23-60、岩波書店
- 日本ローマ字会(1999)「「99式」日本語のローマ字表記方式」『Roomazi Sekai』No.675、社団法人日本ローマ字会
- 羅馬字會(1885)『羅馬字にて日本語の書き方』羅馬字會
- 田中館愛橘(1885)「理學協會雜誌を羅馬字にて發兌するの發議及び羅馬字用法意見」, 『理学協會雜誌』16.
- 竜岡博(1999)『Rômazi (Rômazibun no kakikata)』日本のローマ字社

## A Classification of Japanese Graphs

Takahiro FUKUMORI

This paper first discusses the graphic nature of the writing in general (Section 1), and reexamines the graphic units and the criteria for classifying the world's writing systems that Fukumori & Ikeda (2002) introduced (Section 2 and 3 respectively). Based on these theoretical assumptions, it classifies various *jisetsu* ("graph," or the basic graphic unit in general graphology) used to represent the Japanese language (Section 4).

Japanese *jisetsu types*: Fukumori & Ikeda (2002) classified writing systems in the following format: language-*shiki* unit-*gata* (genealogy-)shape-*kei* writing. The suffix -*shiki* specifies the language a writing system represents. The suffix -*gata* indicates types of the linguistic unit(s) a writing system designates. The suffix -*kei* classifies the graphic shapes used in a writing system and their genetic relationship to other writing systems.

While *Hiragana* (Japanese-*shiki* syllabic-*gata* Hiragana-*kei* writing) and *Katakana* (Japanese-*shiki* syllabic-*gata* Katakana-*kei* writing) are obviously syllabic-*gata*, and Roman alphabet (Japanese-*shiki* segmental-*gata* Latin-*kei* writing), segmental-*gata*, the following can be classified as logographic-syllabic-*gata*: Japanese *Kanji* (Japanese-*shiki* logographic-syllabic-*gata* *Kanji-kei* writing), Arabic numerals (Japanese-*shiki* logographic-syllabic-*gata* Arabic numerals-*kei* writing), Latin alphabet (Japanese-*shiki* logographic-segmental-*gata* Latin-*kei* writing), Greek alphabet (Japanese-*shiki* logographic-segmental-*gata* Greek-*kei* writing) and *Emoji* "pictograph" (Japanese-*shiki* logographic-segmental-*gata* *E* ("picture")-*kei* writing).

Criteria for classifying Japanese *jisetsu*: Four criteria have been used in this paper, viz. structure, position, degree of independence and phonetic values. *Jisetsu* structure can be a vowel, a consonant, a syllable, a prosodic element such as vocalic length, or a combination of them. As for position, whether a *jisetsu* can occur at the beginning of a word (initial) or not (non-initial) has been examined. Degree of independence has been measured as follows. For a

phonogram, a *jisetsu* which represents a syllable by itself was given the highest grade; that which represents a mora by itself, the second highest grade; and that which represents neither a syllable nor a mora by itself, the lowest grade. For a logogram, whether a *jisetsu* can designate a word by itself (high) or not (low) has been examined. Phonetic values of a phonogram can be fixed, dependent on the preceding and/or following *jisetsu*, or none. Those of a logogram can be fixed or dependent on the preceding and/or following *jisetsu*.

Some examples (S = structure, I = degree of independence, Po = position, Ph = phonetic value):

Hiragana あ (large 'a')	S: vowel, syllable; I: highest; Po: initial; Ph: fixed
Hiragana あ (small 'a')	S: vowel, syllable; I: lowest; Po: non-initial; Ph: fixed
Hiragana つ (small 'tsu')	S: consonant; I: second highest; Po: non-initial; Ph: dependent on the following <i>jisetsu</i>
Hiragana か (large 'ka')	S: syllable; I: highest; Po: initial; Ph: fixed
Roman alphabet "k"	S: consonant; I: lowest; Po: initial; Ph: fixed
Japanese <i>Kanji</i> , <i>on</i> -reading	S: syllable(s); I: high; Po: initial; Ph: fixed
Japanese <i>Kanji</i> , <i>kun</i> -reading with 'okurigana' (a phonetic complement)	S: syllable(s); I: low; Po: initial; Ph: fixed